

ICT を活用したIMU 英語学習プログラム

川井一枝・中尾 剛・安斎孝幸

Abstract

The purpose of this study is to report on the first case of Iwaki Meisei University (IMU) English learning course in Web-based. First, the authors described the details of preparation course in Web-based (through manab@ IMU: e-portfolio system in IMU). This preparation course was set for the high school students who were prospective entrants. Second, we reported about the details of “iKnow for Schools (English learning program by Cerego Japan)”, extensive reading, and IMU English Chat Room. “iKnow for Schools” was set for only first year students, and the others were set for all IMU students. We reported on mostly what and how the first year - students learned English through this course in this paper. From these results, we had some useful implications for the next year.

1. はじめに

第二言語習得において「インプット理解とアウトプットの必要性」は最も重要なメカニズム（白井, 2008）であるが、英語を外国語として学ぶ EFL（English as a Foreign Language）環境においては、英語を第二言語として学ぶ ESL（English as a Second Language）環境と比較した場合、英語のインプット量が圧倒的に少ないことは明白であり、日本においても英語運用能力がなかなか向上しない要因の1つとして認識されている。そこでこの点を改善すべく、本学でも英語の様々なクラスにおいて授業外の時間に英語のインプット量を増やす自主学習を行うよう学生に勧めてはいるが、学習意欲には個人差があり、受験という外的な動機もない中、英語に対する継続的な興味や学習意欲を高めることはなかなか難しいのが現状である。また一部の高等教育機関を除き、入学してくる学生の半数が既に英語嫌い、英語が苦手になっている現状（馬場, 2009）があり、英語力の低下ならびに個人差が大きという問題もある。このような学生の多様化に伴い、大学の英語教育において、リメディアル教育をどのように推進するかという問題は年々大きくなっていく。

全国的にもそうしたニーズが高まる中、本学では今年度（2015年）、リメディアル教育・初年次教育・教職支援を含むキャリア教育の充実や推進を目的とした学修総合支援センター：CLASS（Center for Learning Assistance and Support Services）が開設され、入学前から卒業に至るまで学生に対する包括的なサポートを行うこととなった。また、昨年度（2014年）からは双方向型やPBL型などアクティブラーニングの実践ならびに授業外の学習時間を増やす

こと等を推進するために manab@ IMU（学内 e-portfolio システム）¹⁾ も導入している。以下、manab@ と記す。

学修総合支援センターが推進するリメディアル教育分野においては、学生の総合的な英語力向上という目標課題も含まれ、上述したような英語教育における現状を改善するために、入学前学習から入学後を通して組織的・全学的に取り組む英語学習プログラムを実施する運びとなった。ICT を活用した本プログラムの遂行においては、昨年度から全学的に manab@ を導入している点に加えて、今年度から教養学部・薬学部の新入生全員にタブレットを貸与すること等、学生の ICT 学習環境が整うことも追い風となった。

本稿の目的は、本プログラムの実施に至るまでの経緯やプログラム内容の詳細を記述し、学生の取り組み状況（前期分）を報告することである。

2. e-learning による入学前学習

現在、多くの大学が AO や推薦入試等で早めに合格が確定した高校生を対象に、大学への学びに備えたリメディアル教育の一環として何らかの入学前学習を課している（岩崎, 2012; 近藤他, 2012）。高校の在籍者である彼らにとって、大学からの課題は入学前に絶対的な強制力を持たないが、高校側からの要望もあり、リメディアル教育を視野に入れたスムーズな高大接続を考慮すれば、入学前学習の必要性や重要性は今後もいっそう増すことが考えられる。

2.1 導入の目的

本学では 1. で述べたように、manab@ を導入していること、新入生全員にタブレットを貸与すること等を考慮し、英語に関しては、従来の紙ベースではなく e-learning による入学前学習を実施することにした。導入の目的は、①英語の基本的な文法事項を復習する、② ICT を活用した学びのスタイルに慣れる、③入学前から双方向のやり取りを通して大学に親しみを感じてもらおうという 3 点である。

2.2 企画と準備

企画ならびに準備は「学修総合支援センター（2015 年度より運営開始）開設準備委員会」において検討を重ねながら進めた。主な検討課題は、①実施する学部および科目、② manab@ に導入可能な教材の選択、③接続方法ならびに学習方法に関する問い合わせ等のフォロー体制、④パソコンや携帯端末を使えない環境にいる高校生への対応等であった。

検討した結果、①は薬学部・教養学部の入学予定者（全 1 年生）、科目は英語に決定した。②に関しては、互換性、価格、英語の習熟度に差がある点などを考慮した上、manab@ に導入可能な英語教材の中から、基本的な文法事項が復習できる練習問題（全 15 ユニット）に決定した。③への対応策としては、図解入りの詳細なマニュアル（全 4 種類）を作成し、高校生からの問い合わせには入学前サポートチーム（情報システム担当と教務担当の事務職員 3 名）が対応するこ

とにした。④に関しては、環境による差がなるべく生じないよう、本学のPC演習室を開放することとし、合格者が在学している高等学校へも文書等でPC室利用に対する協力を呼びかけた。

また、12月にマニュアルを送付した後も、2月にフォロー用の追加資料を発送し学習を進めるよう促した。さらに2月と3月にはそれぞれセンター入試や一般入試の合格者を追加登録、

同マニュアルを郵送して学習するよう促すこととした。

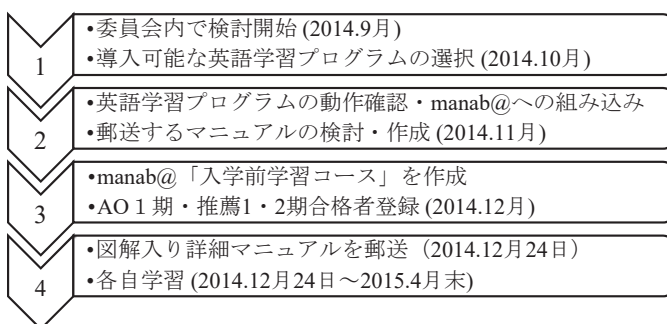


図1 学習開始までの流れ

2.3 取り組み状況

当初は、12月末～入学前3月末日で終了する予定だったが、2月以降に追加登録した学生への対応や終わっていない学生も少なからずいたことから入学後の4月末日まで公開期間を延長した。1月から4月までの取り組み状況は表1、各ユニットの平均点と提出率は表2の通りである。

学生は各ユニットを何度もやり直して学習できるが、合格の閾値を70点として、クリアしないと次の課題に進めない設定にしたため、表2の通り提出率はユニットが進むにつれて低くなっている。結果として、全ての課題を終えた学生は全体の半数強であった。科目は異なるが、岩崎（2012）が報告している入学前学習の実施率66.8%と比較すると10%近く低い数字である。次年度に向けて合格点を70点から60点に引き下げる等、改善すべきところである。

教養学部と薬学部全員の全ユニットの平均点をt検定で分析した結果は表3の通りであり、 $t(-2.478)$ 、 $p < .05$ で、取り組み状況においては学部間に有意な差があった。また、統計的な有意差は確認できなかった。

表1 入学前「英語学習課題」の取り組み状況（人）

	1/7	1/26	2/9	2/23	3/16	4/30
Intro	10	25	34	47	94	152
unit1	4	18	27	39	86	146
unit2	4	12	16	27	74	130
unit3	3	8	11	20	62	125
unit4	2	7	9	19	55	122
unit5	2	6	9	17	49	120
unit6	2	4	7	13	43	118
unit7	2	4	7	13	41	116
unit8	2	3	5	13	41	115
unit9	2	3	4	11	37	114
unit10	2	2	2	10	34	113
unit11	2	2	2	10	32	111
unit12	2	2	2	10	31	110
unit13	2	2	2	10	29	107
unit14	2	2	2	9	24	104

表2 各 Unit の平均点と提出率（%）

Unit内容	平均点	提出率	Unit内容	平均点	提出率
1 文、品詞	88.6	81.3	8 不定詞	87.0	61.5
1 現在形	86.2	78.1	9 動名詞	85.2	61.0
2 過去形	88.7	69.5	10 分詞	85.2	60.4
3 未来形	88.3	66.8	11 助動詞2	85.6	59.4
4 助動詞1	90.1	65.2	12 原・比較	85.2	58.8
5 疑問文1	87.2	64.2	13 最上級	83.2	57.2
6 疑問文2	90.7	63.1	14 接続詞	86.9	55.6
7 受動態	91.0	62.0			

注：平均点は提出者のみで計算、満点は100点

たものの、英語の文法項目別では、動名詞・分詞・比較・最上級・助動詞の項目の平均点が他の項目よりも低かった。このような点は、課題内容の検討や入学後のきめ細やかな指導につなげる等、今後長期的に検討していく課題としたい。

また、対応スタッフが応じたメールの問い合わせ数は、1月に1件、2月に4件、3月に3件の計8件（再問合わせ含む）であった。問い合わせ内容は、英語の課題内容について2件、その他は技術的な質問だった。他に電話での問い合わせが3件ほどあったが、この数値は、当初の予想をはるかに下回る件数であった。

表3 2学部全員の全ユニットにおける平均値の差

	最小値	最大値	平均値	SD
教養学部	0	100	49.1*	40.7
薬学部	0	100	63.2*	36.6

* $p < .05$

2.4 アンケート結果

次年度への課題を検討するために、学習が終わった後にアンケートを行った。学習した場所は、①自宅（79%）、②その他（4%）、③高校（1%）、④公共施設（1%）（⑤本学6%：入学後4月）の順で、自宅が79%と最も多く、利用したデバイスは、PC（56%）、スマートフォン（30%）、タブレット（10%）、その他（4%）でPCが半数以上であった。他の質問項目に関する結果は表4の通りである。アンケート結果によれば、対面で説明を行わなくても送付資料はほぼ理解されていた。また本学の e-portfolio システムである manab@ を利用した学習に対しても概ね良い反応であり、2.1 で述べた導入目的の②に対してはほぼ達成されたと思われる。

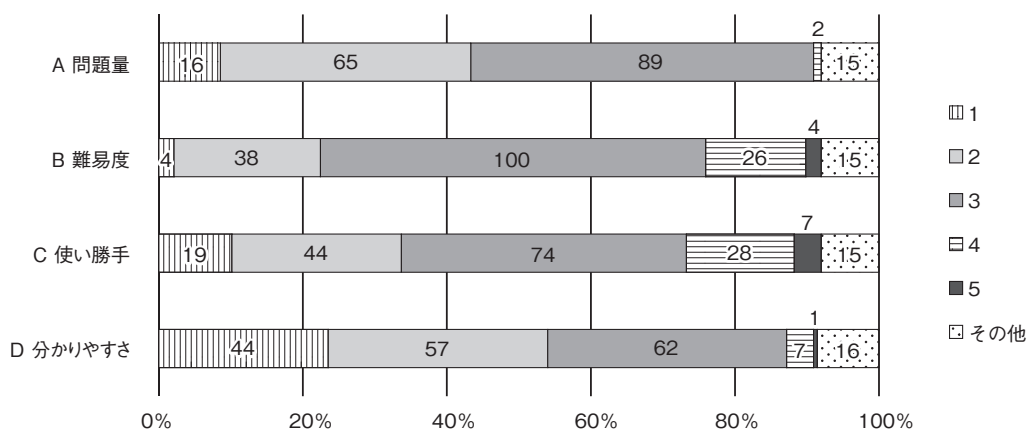


図2 入学前英語学習アンケート結果

注：Aは4件法、B～Cは5件法、1～5の詳細は以下の通り

- A：1 大変多い ⇔ 4 少ない
 B：1 大変難しい ⇔ 5 簡単すぎる
 C：1 大変使いやすい ⇔ 5 大変使いにくい
 D：1 大変分かりやすい ⇔ 5 大変分かりにくい

2.5 まとめ

入学前学習に関して、取り組み状況やアンケート等から確認できた点は以下の通りである。

- A：対面式の説明がなくても郵送マニュアルのみで学習開始～継続がほぼ可能であることがわかった。
- B：全課題を終了させた者は全体の55.6%であり、各ユニットの達成率は終盤にかけて下がった。
- C：教養学部と薬学部における全ユニットの平均点差は14点あり、1%水準で有意な差を確認した。
- D：英語の文法項目別では、動名詞・分詞・比較・最上級・助動詞の項目の平均点が他よりも低かった。

Aに関しては、スマートフォンなどの普及に伴い、各家庭内においてもICTを活用した学習環境が整い、気軽にe-learning学習に取り組めるようになったこと等が推測される。また、教職員から例年よりも本学のe-portfolioシステムmanab@への導入がスムーズだったことが報告されており、入学前からmanab@上で学習を行った効果が表れたと思われる。導入目的の「②ICTを活用した学びのスタイルに慣れる」に関しては概ね達成されたと解釈してよいだろう。

Bに関しては、学習期間を入学後4月末日まで延長したにも関わらず大幅な増加は見られなかった。やはり次unitへの閾値(合格点)を70点としたことが大きな要因の1つと考えられる。

Cに関しては、入学前の時点において、両学部新生の英語力や学習意欲の差が顕著に表れた結果であり、本学側が関与できる部分は少ないが、課題の内容等に関しては再考する余地があると思われる。

Dに関しては、高校卒業の時点で該当分野の習得が不十分な学生が多いことが推測される。入学後の指導に活かす等、授業内におけるきめ細やかな指導につなげたい。導入目的の「①英語の基本的な文法事項を復習する」であるが、Bの問題と連動しており、苦手分野まで到達せずに学習期間が終わってしまった学生が多いことから、基本的な文法事項の復習は不完全であったと思われる。

また、導入目的「③入学前から双方向のやり取りを通して大学に親しみを感じてもらう」に関しては、問い合わせ件数は少なかったが、スタッフと双方向のやり取りを通して大学への親しみや理解が深まったと思われる。今後は、質問に応じるという受動型のサポートだけではなく、より能動型のサポートを通して、入学前の高校生の大学生活への期待や学習意欲を高めるような工夫を考案し実施したいと考えている。

3. ICTを活用した入学後の英語学習プログラムの概要

1. で上述したように、少子化・多様化に伴い学生の英語力は年々低下する傾向にあり、個人

差も激しい。そこで入学後にこの個人差を少しでも減らし、英語のインプット量を全体的に増やすため、今年度から ICT を活用した授業外の自主的な英語学習の取り組みを試みることにした。新入生全員にタブレットが貸与されたことで、大学構内においては全員の ICT 学習環境が整うことも本プログラムを推進する大きな要因となった。

本プログラムは、① WEB 上で行う英語の反復学習（1 年生対象）、②英語多読（全学生対象）、③英会話（全学生対象）の 3 つから構成されている。①と②は英語のインプットを増やすことが主な目標であり、③は自主学習や授業を通して学習した成果を自分で試すアウトプットの場として設定した。学習イメージは図 3 の通りである。

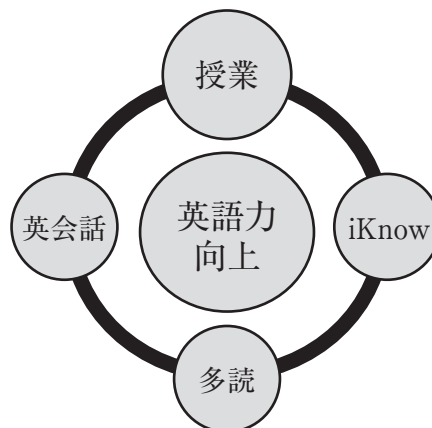


図 3 英語学習プログラムのイメージ

3.1 WEB 上で行う英語の反復学習：iKnow

WEB 上で行う反復学習は、数種類のプログラムから内容や価格などを比較検討した結果、(株)セレゴジャパンによる学習プログラム「iKnow for Schools」(旧 smart.fm) を使用することとなった。以下 iKnow と記す。iKnow の特長は、①脳科学と認知心理学に基づいた反復学習メソッド、②マルチデバイス対応、③学習履歴や記憶強度を視覚化の 3 点である。単調な反復練習もゲーム感覚で飽きずに出来る、タブレット・PC・スマホなどデバイスを選ばず好きな時に何処でも学習できる、達成感を持って学習が進められる等、デジタルネイティブである昨今の学生にとっては、非常に使いやすく学習が継続しやすい作りとなっている。

評価は、1 年生の必修・通年科目「英語 B」(リスニング・スピーキング) において、学習時間や達成度を評価全体の 10% に取り入れた。前期の評価期間は 5 月 14 日～7 月 24 日であり、目標の学習時間は 12 時間以上とした。期待される効果は、インプット量増加に伴う英語運用能力の向上・授業外自主学習時間の増加・貸与端末使用率の増加である。

3.2 英語の多読：IMU 多読プロジェクト

英語多読を開始するにあたり、図書館内には多読スペースを設置して既存本を 1 ケ所に集約、Oxford Reading Tree (絵本の graded reader) シリーズを追加で購入した。2 年生以上の学生のためには、図書館受付に「多読の手引き」や「記録シート (紙版)」を常置した。学内には多読を勧めるポスターを掲載し、英語の各授業や manab@ のコースニュースなどでも広く周知し多読を行うよう声掛けした。

評価は iKnow と同じく、1 年生の必修通年英語科目「英語 A」(リーディング・ライティング) において達成度を評価全体の 10% に取り入れた。更に 1 年生には、従来の紙版読書記録ではなくエクセルシートで作成したものを manab@ 上のコースを通してデータで配信した。学生は図

書館で本を読んだ後、すぐに語数や感想をタブレットに記入でき、読書記録を携帯する手間が省ける、また紛失等の心配がない等の利点がある。各自タブレット上でファイルを管理した後、指定期日に manab@ を通してそれぞれの担当教員にデータで提出する。期待される効果は、英語運用能力の向上・授業外自主学习時間の増加・図書館ならびに貸与端末使用率の増加である。

3.3 昼休みを利用した英会話：IMU ENGLISH CHAT ROOM

日々の授業や iKnow・多読などで学習した成果を試す場として、週に4回（月・火・木・金の昼休み）、ネイティブの英語教員と英会話を楽しむ時間を設けた。対象者は全ての学生であり、特にタブレットも使用しない。場所は、授業を行う通常教室ではなく学修総合支援センター内の CLASS SPACE である。このプログラムは任意参加であるため評価を行わず、担当する教員が、参加者数・名前・トピックの内容等をノートに記録している。期待される効果は、学生の学習意欲向上・グローバルな視点の形成または助長・CLASS SPACE 稼働率の増加である。

表4 入学後英語学習プログラムの概要

	iKnow	IMU多読プロジェクト	IMU English Chat Room
対象者	1年生	全学生（1年生のみ評価）	全学生
評価方法	英語B 全体評価の10%	英語A 全体評価の10%	行わない
評価期間	5月14日～7月24日	6月1日～7月12日	なし
学習目標	学習時間：12時間以上	語数：10,000語以上	英会話を楽しむ他
学習場所	特になし	図書館・自宅他	CLASS SPACE

4. ICT を活用した入学後の英語学習プログラムの取り組み状況

本プログラムは今年度が実施初年度のため、前期分のみ報告となる。プレイスメントテストは、4月と12月～1月（予定）に実施するため、総合的な英語力がどの程度変化したかについての報告は次稿としたい。本項では、学部ごとの取り組み状況や学部間の比較、入学前学習の取り組み状況や4月実施のプレイスメントテストとの関係などについて分析できた結果について報告する。

4.1 WEB 上で行う英語の反復学習：iKnow

評価期間は、5月14日～7月24日、目標の学習時間は12時間以上（12時間＝43,200秒）である。前期の取り組み状況は、表5の通りである。表7の通り、教養学部は、最小値（0）最大値（81,414）平均値（16,157）標準偏差（18,901）、薬学部は、最小値（0）最大値、（70,228）平均値（28,317）標準偏差（21,280）であり、この結果を *t* 検定で分析したところ、学部間の差は1%水準で有意であった。

iKnow の個別レポートを確認したところ、薬学部においては、学生の取り組み方に習熟度クラス間の差があまりなく顕著な変化は見られない一方、教養学部においては、習熟度クラス間ま

た学生の個人差が非常に激しいことが確認された。学習の仕方等を含め、今後も引き続き英語の授業内での声掛けや個別の対応を推進していく必要がある。

4.2 英語の多読：IMU 多読プロジェクト

評価期間は、6月1日～7月12日、目標語数は10,000語以上である。前期の取り組み状況は、表6の通りである。教養学部は、最小値(0) 最大値(39,451) 平均値(8,673) 標準偏差(6,516)、薬学部は、最小値(0) 最大値(34,154) 平均値(9,867) 標準偏差(6,443)であった。この結果をt検定で分析したところ、表7の通り多読の取り組み状況に関しては学部間の差がないことが確認された。

多読に関しては、学習目標が10,000語と低く設定されたこともあるが、教養学部の学生にとってはiKnowよりも多読学習の方が抵抗が少ない、また取り組みやすいと感じている学生が多いのかもしれない。

表5 iKnow 取り組み状況 (5月14日～7月24日)

学習時間	(人数)		
	全体 (186)	教養学部 (89)	薬学部 (97)
0 h	11% (21)	10% (9)	12% (12)
3 h未満	34% (63)	48% (43)	21% (20)
3-12 h未満	22% (40)	22% (20)	23% (22)
12 h～	33% (62)	20% (19)	44% (43)

表6 英語多読の取り組み状況 (6月1日～7月12日)

総語数	(人数)		
	全体 (186)	教養学部 (89)	薬学部 (97)
0:未提出	21% (39)	23% (20)	20% (19)
1-9,999語	8% (14)	11% (10)	4% (4)
10,000語～	71% (133)	66% (59)	76% (74)

表7 iKnow と英語多読の取り組み状況学部比較

	教養学部 (89)				薬学部 (97)			
	最小値	最大値	平均値	SD	最小値	最大値	平均値	SD
iKnow	0	81414.0	16157.3***	18901.7	0	70228.0	28316.7***	21280.8
多読	0	39451.0	8575.3	6543.6	0	34154.0	9866.9	6443.0

*** $p < .001$

4.3 昼休みを利用した英会話：IMU ENGLISH CHAT ROOM

開催期間は5月11日～7月24日までで全42回、延べ利用者数は219名であった。①7月24日時点での総参加者数は219名（学生115名・社会人聴講生や職員104名）、1回の平均参加者数は5名、学部ごとの利用状況は、人文学部95名、薬学部11名、科学技術学部5名、教養学部3名、不明1名の順となっている。人文学部表現文化学科（特に教職課程履修者）の利用が最も多く、1年生しかいない教養学部の利用が最も少ない。

薬学部を含めた1年生全員にアンケートを通して参加しない理由を聞いたところ、①英語が嫌い・苦手32名、②外国人の先生と話すのが苦手29名、③時間がない19名、④知らない人と話すのが苦手18名、⑤その他15名という回答であった。学内のポスターや英語の授業等で参加を呼びかけて周知しているものの、教養学部の1年生はEnglish Chat Roomを担当している外国人講師の担当授業がなく接点を持つことがなかったため、親しみが持てず参加しにくかったということも考えられる。また、社会人聴講生や職員が104名と参加者のほぼ半数を占めているが、社会人の積極的な参加は学生にとって学習者としての良いモデルであり、学習意欲を高める要因にもなっていると思われる。

4.4 アンケート結果

iKnow と多読に関して、それぞれ①自分の英語学習に役立つか、②学習は楽しいかについて聞いたところ、結果は図4の通りであった。

「英語学習に役立つ」と回答した学生は、iKnow 79名、多読56名であり、「英語学習に役立つ」と回答した学生（iKnow 22名、多読32名）より多かった。一方、「楽しい」と回答した学生は、iKnow 39名、多読36名であり、「楽しくない」と回答した学生（iKnow 47名、多読42名）の方が多かった。あまり楽しくはないが、役立つと回答している学生が多いという結果は、教員側の意向をくみ取ろうとする学生の素直さや真面目さ、必修科目の評価10%に加点されるから学習するという学生の義務感の表れとも言えるかもしれない。

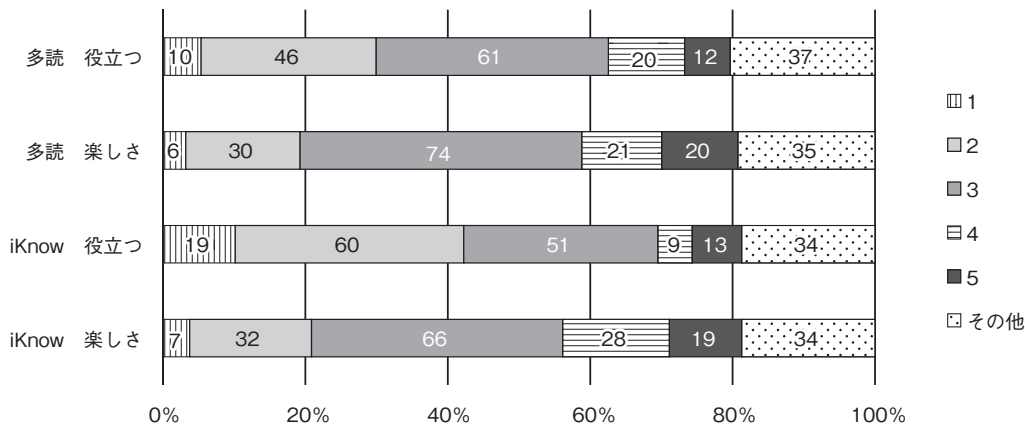


図4 iKnow と英語多読に関するアンケート結果（186名）

注：1 大変役立つ ⇔ 5 全く役立つ、1 とても楽しい ⇔ 5 全く楽しくない

また、役立つかどうかの項目で、iKnow79名に対し多読56名という回答の差は、子ども向けの絵本から多読をスタートしたことが影響している可能性もある。多読学習に対する理解不足から、学生が「簡単過ぎる絵本を読んでも自分の英語学習には役立たないのではないか」と感じたことは十分に予測できる。今後も引き続き、多読学習に対する理解をさらに周知徹底させていく必要がある。

5. まとめ

以上本稿では、入学前から入学後の英語学習について1年生の取り組み状況を中心に報告してきた。半期分（前期）のデータではあるが、今年度は教養学部の開設初年度でもあるので、今後の参考までに、薬学部との平均差ならびに入試型種別における平均差などについてまとめておく。

5.1 教養学部と薬学部のプレースメントテスト・英語学習における平均差

入学前学習、入学後の学習（iKnowと英語多読）、プレースメントテストにおける教養学部と薬学部の記述統計量は表8の通りである。それぞれの平均差を t 検定で分析した結果は、入学前学習において $t(184) = -2.478, p < .05$ 、プレースメントテストにおいて $t(184) = -4.587, p < .001$ 、iKnowの取り組みにおいて $t(184) = -4.105, p < .001$ の通り、それぞれに有意差が確認された。英語多読の取り組みにおいては、 $t(184) = -1.252, p = .212$ で有意な差は見られなかった。

プレースメントテストにおける差は入学前の時点での英語力の差と言える。今後の推移にもよるが、授業の指導内容や方法といった個々の教員裁量だけでなく、クラス編成や統一教材の選択など枠組みの変更に関しても引き続き議論を続けていく必要がある。授業外の自主学習であるiKnowと英語多読に関しては、iKnowの取り組みのみに差があることから教員からの積極的・継続的な声掛けを心掛けたい。

表8 プレースメントテスト他英語学習の学部間の平均差

	学部	最小値	最大値	平均値	SD
入学前学習	教養	0	100.00	49.123 [*]	40.732
	薬	0	100.00	63.164 [*]	36.558
プレースメントテスト	教養	73.00	196.00	136.697 ^{***}	27.191
	薬	99.00	267.00	157.330 ^{***}	33.502
iKnow	教養	0	81414.00	16157.315 ^{***}	18901.695
	薬	0	70228.00	28316.722 ^{***}	21280.818
英語多読	教養	0	39451.00	8672.739	6515.874
	薬	0	34154.00	9866.887	6443.002

*** $p < .001$, * $p < .05$

5.2 他要因との相関関係

本項では、入試種別・プレイズメントテスト・入学前学習の取り組み状況・入学後学習の取り組み状況がどのように関係しているかについて報告する。入試別に平均点をまとめた結果は表9と10の通りであり、プレイズメントテストの点数は1部を除き、ほぼAO⇒推薦⇒学力⇒センター試験の順に高くなっている。

さらに、学部別に Pearson 相関係数により分析したところ、表11と12の通り有意な差が確認された。教養学部では、プレイズメントテストと iKnow・入試型の間、iKnow と英語多読の間において中～やや強い相関があり、iKnow と入学前学習の間において弱い相関があった。薬学部では、プレイズメントテストと入学前学習・入試型の間、iKnow と英語多読の間において中～やや強い相関があり、プレイズメントテストと iKnow・英語多読の間、iKnow と入学前学習の間、入学前学習と入試型の間において弱い相関があった。

両学部とも表9と10にみられる通り、プレイズメントテストの得点と入試型には統計的にも密接な関係があることが確認された。また、両学部とも iKnow と英語多読の取り組み状況には関連があり、自主的に学習する学生の共通点が見える。薬学部においては入学前～入学後の全ての学習とプレイズメントテスト得点において相関が見られたが、取り組み程度(学習量)の問題であり、AO型の取り組み状況はやや芳しくはないものの、全体としては学習習慣が身につけている学生が多い傾向にある。教養学部においては、個人差はあるものの、AO型入試と他型入試において、入学後の学習の取り組みに顕著な開きがあり、該当学生においては、注意深く見守りながら個別指導や細やかな声掛けなどをしていく必要がある。また薬学部と比較して、学習習慣が身につけている学生とそうでない学生との差が大きい傾向にあり、教員全体で学生全体の意識を変えていく必要があると思われる。

表9 教養学部1年生 入試型別における平均差

入試型別	人数	入学前 (100)	P テスト (300)	iKnow	英語多読
AO	12	30	124	4187	4351
推薦	47	51	130	18222	9100
学力	10	49	145	18620	10889
センター	20	57	155	17256	8721

注：() 内は満点、Pテスト=プレイズメントテスト

表10 薬学部1年生 入試型別における平均差

入試型別	人数	入学前 (100)	P テスト (300)	iKnow	英語多読
AO	18	54	143	19874	8649
推薦	30	56	136	31166	9181
学力	22	67	167	28897	11028
センター	27	74	183	30307	10494

注：() 内は満点、Pテスト=プレイズメントテスト

表 11 教養学部：入試型と英語学習状況 Pearson 相関係数

		プレイ ス メント	iKnow	英語多読	入学前学習	入試型
プレイ ス メント	相関係数	1	.329**	.074	-.017	.406*
	有意確率		.002	.493	.874	.000
	N	89	89	89	89	89
iKnow	相関係数	.329**	1	.530**	.253*	.129
	有意確率	.002		.000	.017	.227
	N	89	89	89	89	89
英語多読	相関係数	.074	.530**	1	.183	.140
	有意確率	.493	.000		.086	.190
	N	89	89	89	89	89
入学前学習	相関係数	-.017	.253*	.183	1	.148
	有意確率	.874	.017	.086		.166
	N	89	89	89	89	89
入試型	相関係数	.406**	.129	.140	.148	1
	有意確率	.000	.227	.190	.166	
	N	89	89	89	89	89

** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$

表 12 薬学部：入試型と英語学習状況 Pearson 相関係数

		プレイ ス メント	iKnow	英語多読	入学前学習	入試型
プレイ ス メント	相関係数	1	.245*	.206*	.347**	.532**
	有意確率		.015	.043	.001	.000
	N	97	97	97	97	97
iKnow	相関係数	.245*	1	.447**	.212*	.123
	有意確率	.015		.000	.037	.231
	N	97	97	97	97	97
英語多読	相関係数	.206*	.447**	1	.062	.121
	有意確率	.043	.000		.546	.238
	N	97	97	97	97	97
入学前学習	相関係数	.347**	.212*	.062	1	.220*
	有意確率	.001	.037	.546		.030
	N	97	97	97	97	97
入試型	相関係数	.532**	.123	.121	.220*	1
	有意確率	.000	.231	.238	.030	
	N	97	97	97	97	97

** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$

5.3 今後の課題

入学前学習は今年度を踏まえて、次年度も e-learning で行うことが決定しており、検討事項として①より本学のシステムに合う学習プログラム選定、②より理解しやすいマニュアル作成、③各課題の合格点(閾値)④能動型サポートの工夫等があげられる。

入学後の学習、iKnow と英語多読に関しては、どちらもまだ取り組んでいない学生へのフォローが急務である。非常勤講師も含めた英語教員間で情報を共有し、授業内外での積極的な声掛けやきめ細やかな指導を心掛けたい。また、当初の目的である英語のインプット量増加に伴い、熱心に取り組んでいる学生に関しては全体的な英語力の向上が期待される。4月に行ったプレテストを12月～1月に再度行い、前後を比較し分析する予定である。

注

- 1) 学修支援システム (manab@IMU: 通称マナバ) は、いわき明星大学が運用しているe-ラーニングシステムである。パソコンやタブレットのブラウザ機能を使って、各種学習教材が利用できるほか、授業レポートの提出やアンケート提出、配布資料の参照といった学習をサポートする色々な機能を利用することができる。また、学生と担当教員のコミュニケーション手段としても活用されている。

引用文献

- 岩崎光伸 (2012).「近畿大学における入学前後eラーニング(リメディアル教育の役割)」『リメディアル教育研究』7-1, 37-41.
- 近藤伸彦, 本田直也, 石毛弓, 野波侑里, 奥田雅信 (2012).「受け入れ学生の多様化に対応するための入学前教育」『リメディアル教育研究』7-1, 42-45.
- 白井恭弘 (2008).『外国語学習の科学: 第二言語習得理論とは何か』東京: 岩波新書
- 馬場千秋 (2009).「英語学習支援の試み: 学習面とメンタル面のサポートの事例」『リメディアル教育研究』4-2, 69-72.

(かわい かずえ/英語教育学・第二言語習得論)
(なかお たけし/情報通信工学・教育工学)
(あんざい たかゆき/情報システム運用管理)